

であり、在来農業の開発がその対象である場合には、事業と研究の区分が困難な場合も出てくる。この意味では、政府が実施する在来農業の開発は、あくまでも、営利事業としてではなく、前述の(3)、すなわち、国の農業研究機関が少なくとも技術面では主導性を持って推進すべきものである。

最後に、発展途上国の農業技術開発において、現在最も要望されているものの一つは、十分な基礎知識・経験を持った自国の研究者・技術者であることを指摘しておきたい。この意味では、日本の大学は、その果たすべき役割を従来以上に自覚すべきだと思う。

このことと関連して、IRRI が設立されるまでの米国のコーネル大学とフィリピン大学農科大学とが、ロックフェラー財団の資金によって実施していたプロジェクトについてふれてみたい。このプロジェクトの特徴は次のようであった。(a) コーネル大学から数名の有能な教授や若手研究者がフィリピン大学に常駐し、教育・研究を行う。(b) フィリピン大学で、かなりの授業単位を取得し、また学位論文のためのデータを多く集めた有能な大学院学生をコーネル大学に派遣し、そこで、不足単位をおぎない、また補足的な実験を行

なって学位論文を完成する。なお、この教育を受けた者は帰国後、大学や試験場に勤務することを前提とする。(c) コーネル大学の大学院学生についても同様に、フィリピン大学で学位論文のための研究に従事する機会を与える。さらに、(d) タイ、インドネシアの有能な若者を発掘し、フィリピン大学の学部を受け入れ、学部卒業者の中からとくに優秀な学生を選出して(b)のプログラムに編入する。こういうことを長年実施していたのである。その実績を通じて、コーネル大学・フィリピン大学・タイやインドネシアの大学や政府役人との人脈が築かれていったのである。そして、この人脈がIRRIがフィリピン大学の構内に設立され、東南アジアの現実の稲作に接近し、迅速に成果を収め得た背景であったことを忘れてはならない。

日本が熱帯農業開発に本当に寄与しようとするならば、もっと熱帯諸国の若者に視点を向け、彼らを研究者として、また技術者として養成し、われわれも彼らと共通の意識を持って、協力し得る体制を長期的に築いていかなければならない。それは、日本の大学の使命であると考えられる。

第3セッション討論

司会 久 馬 一 剛*

報告者の論調とコメンテーターのそれとの間には研究課題や研究方法に関する展望において若干ニュアンスの違いがあった。一口でいうと、報告者は日本の農学研究者が現地へ入って現地の諸条件に整合的な体系化技術を地道に開発してゆくことの重要性を説いたのに対し、コメンテーターは素材提供に終わってもいいから一つの技術の breakthrough を見

* 京都大学農学部

出すような基礎研究の大切なことを強調した。それに関する議論は以下のものであった。

体系化技術の開発といっても実際にはいろいろな側面をもっており、日本人研究者が参加できる場面としてたとえば、体系化技術のための基礎的研究や、かなり広範な地域レベルでの地域開発計画の樹立などをあげることができよう。この点からは、コメンテーターの説くような、日本人研究者は日本にあって

基礎的研究に専念せよという論は一局面をついているにすぎない(福井)。このほか一、二の議論を受けて、報告者は再び自説を強調し、ある伝統的な一つの技術体系があってそこに別のたとえば多収穫技術が提示された場合に、われわれ外国人研究者の参加できる局面は多々あり、二つの異なる技術的なギャップを一つ一つ埋め、あるいは別種のもっとその環境に適した技術体系を見出すべく、現地の人々とともに地道に現地研究をやってゆくことの必要性を説いた。コメンテーターの強調するところは、外国人研究者は、とくに日本などでは専門家の数が少ないことからしても、現地の研究者、技術者が自分たちで問題を解決してゆく能力を養うことへの援助にとどめおくべきで、長期的にみるとむしろこの方がより親切である。

以上のほか、われわれの研究課題に関する示唆として、二、三の参加者から以下のような提言があった。日本の熱帯農業研究に2本の流れがある。一つは台湾で開花した熱帯農学の流れを汲むもので、他の一つは企業に所属する研究者・技術者によって培われたプランテーション作物の研究である。このほかに今日必要なのは熱帯の未利用あるいは低利用植物資源の発見と利用に関する研究と、日本

農業の研究をしつつも目を熱帯にも向け、比較農業研究の視点をもつことである(西川)。灌漑の問題一つをとってみても、灌漑技術者のみで解決できるのはごく一部の技術的問題であるにすぎない。たとえば灌漑導入後の作付体系、水利組織運用の社会的問題、圃場整備事業のあり方やすすめ方、限られた水源でもってどこを灌漑するかを決定することなどのように、他分野の専門家と共同で考究すべき課題がきわめて多い。interdisciplinaryな研究体制をつくることが大事である(岡本)。われわれの中に熱帯農業研究を指向する人の数がいかにも少なく、それをいかに養成するか(西川)の大問題も指摘され、また、研究課題もしっかり定まっておき研究施設も整っているICRISAT(国際半乾燥熱帯作物研究所)への日本人農学者の一層の協力と研究参加を呼びかける要請(小堀)もきかれた。

研究課題や体制に関する議論がつぎつぎに出てきたが、時間切れとなり、これらの討論課題は午後の総合討論にひきつがれることになった。

(文責 海田能宏**)

** 京都大学東南アジア研究センター